

天德山龍泉院

住職 椎名宏雄老師

平成十三年
月例会

口宣

第四号

龍泉院參禪會

菩提心とはぼだいしん

無常を觀ずる心むじょう かん こころこれなり

道元禪師の『学道用心集』の一節であります。「菩提心とは」道を求める心、やる気を起こす心であります。それは何によって高められるかといいますと「無常を觀ずる心」であります。

「無常を觀ずる」「無常」とは、常つねで無い、と書きます。知人等の不幸の場合に無常ということが云われますが、そういうことだけを無常というのではなくて、私共の生活体験の中で一回コッキリ“一期一会”、全てが一回コッキリであります。これが実は無常なのです。一回しかないから無常なのです。

そういうふう to 受け止めないと、無常というものが他人ごとになってしまふ。或いは觀念的な單なる考えになってしまうのであります。そうではなくて無常は自分にとって、或いは誰にとってもそうなのですが、自分にとって一回だけの体験、一回コッキリの体験、それが無常であります。こう受け取るべきであります。今日、今、ここに、坐っている。こんなにありがたいことではないのであります。

特に今日はこの寒さの中で、この雪の中で、坐れることは無上の喜びであります。だって、坐りに来たくても来られない方が大勢いらっしゃる。交通が不如意の方も大勢おられるでしょう、その中で何とか出て来て坐る、これは大変なことであります。それと、自分一人で出来ない、一人ではなかなか出来るものじゃない。ところが道友の皆様方がおられる、これで坐れるのです。これも実にありがたいことであります。年番幹事さんの方は、よもや間違つても、えらい日にぶつかったとは考えない、むしろこういう日に早く来て皆様のお世話が出来る。これはありがたい、こういう時にぶつかつてありがたいのだ！これこそ、一期一会であります。要するにいろんな意味で今日、今、こういう時に坐れる。これは実にありがたいことであります。

こういう一期一会の無常、というものを噛み締めて坐る。それが「菩提心」であります。“ありがたい”、この一時、今年度の最初のこの一時、お互いにありがたいさを噛み締めて坐りたいものであります。

「菩提心とは無常を觀ずる心これなり」

平成十三年一月 合掌

生死事大なりしやうじじだい

無常迅速なりむじやうじんそく

このお言葉は、六祖慧能禪師のお弟子さんでありますようかげんかく永嘉玄覺という方のお言葉であります。唐の時代の中ごろであります。

道元禪師は『正法眼蔵』『隨聞記』の中で、このお言葉を取り挙げて、重要な弁道修行上のあり方をお示しいただいております。

「生死事大」というのは、生きる死ぬ、という事が大きいと書きます。「無常迅速」は何方どなたもご存知のとおり。この坐禪の後、開講板といって板をパンパンと打って『正法眼蔵』の提唱が始まり

ますが、この木の板はんには「生死事大 無常迅速」の言葉が書かれております。今まで気がつかなかった方は板をどうぞご覧になって下さい。「生死事大」というのは、人生は一大事だということであります。いわずと知れたことではありますが、頭だけでわかってい

るが身体からだでわかっていない、これが「生死事大」であります。毎日毎日生きている、暮らしている、これが情性で生きているいか、安閑で暮らしていないか。仏法の世界、禪の世界では生活がすべて修行、こういう建前であります。だから「生死事大なり」、

こういわれるのであります。道元禪師は瞬間瞬間が真劍勝負である、真劍勝負の生きざまでなければ本物ではない、こうおっしゃる。それなら、どうして真劍勝負になるのか、「無常迅速」だからであります。

ついこの間お正月だと思っていたら、もう二月が終おしまいになる、飛ぶような速さであります。その間に様々な世の中の動きがあり、自分の様々な体験があった、そういったものが続いている訳です。坐禪に來たくても來られない方、暮れから体調を崩され、坐禪に早く復歸したいと願っている方もいらっしやいます。寒い中でこの冬坐りきれることは誠に幸せであります。ありがたいのであります。また大勢の方と一緒に坐れる、これが素晴らしい。皆「無常迅速」だからであります。

こう思いますと、この一炷、この瞬間、かけがえのない坐禪であります。もう、これっきり出来ないかもしれないと思えば、この一炷、誠に充実した仏祖の行事そのものになれるはずであります。そういう気持ちで我々はやらなくてはなりません。

「生死事大なり 無常迅速なり」

平成十三年二月 合掌

將謂えらく胡の鬚赤しと

やうらに赤鬚の胡あり

道元禪師の漢文の語録であります『永平広録』巻七の「上堂」のお言葉の一節であります。上堂といいますが、公おおやけの説法であります。その最後の締めのお言葉がこの面白い「赤鬚」のお言葉であります。「將謂えらく胡の鬚赤しと」さらに赤鬚の胡ありしやくしゆ「胡」は古いという字に月を書く、胡桃くるみという時の胡こ、胡椒こしょうの胡こつまり中国の西方の国、西域の方向、そちらの産物はみな胡をける。「胡の赤鬚」といいますと西域の外国人は赤鬚さんだ、こういう意味であります

そう「將謂えらく」、思っていたんだが、何とまた「さらに赤鬚の胡あり」、赤鬚さんが実は外国人だった。こういうことがわかった。これは例えでありまして、この上堂の一段が坐禅というものの素晴らしい功德を説き示された一段であります。その締めの言葉ですから、同じような言葉を引つ繰り返したのです。坐禅をすれば心身脱落と置いていたら、何のことはない心身脱落ということが坐禅だったのだ、こういう意味であります。もっと平たく

いいますと、坐禅をすれば悟りをひらけると思っていたらば、何のことはない、そうじゃない、坐禅を本当に行うことがお悟りだ。

これが坐禅の功德を述べられた長い上堂の締めのお言葉であります。ここに道元禪師の坐禅というものの修証観が、はっきりと打ち出されております。坐禅をして仏になるのではない、仏に成りきった本物の坐禅がもうそのまま仏さまだ、仏というものは本当に一生懸命やっている姿なんだ。こういう意味であります。

これは誰なんだ、ということは一切わからない。すべての人がそうなんだ！これが素晴らしい。人間というものは誰でも苦しい目にあったり悲しい目にあったりしますと、それを乗り越える力が出てきます。素晴らしい力が湧きあがって来ます、そういう経験をしなさいといけない。同じ様に真剣に坐禅を修うと、仏としての自分が丸出しに出てくる。こういう素晴らしい道を道元禪師が教えてくださるのであります。さあ！仏様であります、仏様としての坐禅、これを私共が、今行じようとしております。自分じゃない、仏様であります。こういった坐禅を行じなくてはならないのであります。

「將謂えらく胡の鬚赤しと」さらに赤鬚の胡あり

平成十三年三月 合掌

しるべし行を迷中に立て証を

覚前にうつることを

『学道用心集』第三条の一節であります。この書物は、道元禪師が三五歳のときに著わされました。仏法を学び修行しようとする人々に対する基本的な心得として、坐禪を中心とする十か条に分けて説き示された、それはすばらしい内容の著述であります。

その第三条は「仏道は必ず行によって証入すべきこと」という項目。このタイトルのように、仏道は行、実践であります。どんなに沢山の、幾千万巻も経文や語録や参考書を読んでも、それは所詮、知識であり、頭の中での理解です。それもないよりはマシですが、学道ということになると、ちよつとちがいます。むしろ知識はジャマをします。誤りや迷いを起こさせるタネになることが多い。だからこそ行が大切であります。

ところが困った問題は、行に対する迷いであります。こんなボンクラ坐禪をやって何になるんだろう。さんざんやってきたが、自分はちつとも変わらないと、ボンクラ坐禪をタナに上げて、頭で考えこんでしまう。これは禁物、これではいけません。じつは、

そんなことを考えながら坐っているから、ボンクラ坐禪になってしまうのです。坐禪はちつぽっけな頭のはたらきではない、この身体全体が大宇宙のいのちとぶつづきになった大きな実践なのであります。

たしかに、迷いは誰にでもあります。いや、むしろトコトン迷ったほうがいいのかもしれませんが。臨済では大迷が大悟をもたらすというぐらいいですから。道元禪師はありがたいことに「行を迷中に立て」れば「証を覚前に得る」のだ、とおっしゃっている。いや、ありがたいですね。ほかならない、迷いに迷いながらの身のままで、坐ればそこには覚りがちゃんと現れるのだ、といわれているのであります。

もちろんそれは、迷いも悟りもない法に契った正身端坐でなければなりません。迷いのうずの中にいながらも、迷いをフツ切って正身端坐に打ち込む。すると、いつの間にか身心に安心がそなわってくるのであります。

「煩惱即菩提」とはそういうことです。迷いのままで悟り。ありがたいことであります。

「しるべし行を迷中に立て証を覚前にうつることを」

平成十三年四月 合掌

仏祖の屋裏に

大尊貴生なるは結跏趺坐なり

『正法眼蔵』「三昧王三昧」の冒頭の一節であります。「三昧王三昧」というのはいうまでもなく、坐禅が諸々の中で王様の三昧である、こういう意味であります。その冒頭に「仏祖の屋裏に大尊貴生なるは結跏趺坐なり」。「仏祖の屋裏」、仏祖のまつただ中、「大尊貴生」、最も素晴らしく尊いもの、それが「結跏趺坐」である。こういう格調の高い教えであります。三昧王三昧の巻は、全文に渡って極めて格調高い珠玉の一篇であります。仏法といわれる修行の中には様々な実践行がありますが、何よりも素晴らしく何よりも尊いのは坐禅であります。“これ以上のものは全く何もない”。そういう気魄が伝わって参ります。何といっても、正伝の仏法を正しく行ずれば、それは仏祖と同じである。お釈迦様の坐禅と同じなんだ。つまらない我々、何のたれ兵衛という人間でない。その人間を通じて、いまお釈迦様が現前されるんだ。これが“正伝の仏法”であります。

雨が激く降ろうと、暑い最中であらうと、寒い厳寒の中であら

うと、それを乗り越えて静かに坐る、沈黙の坐禅。環境の如何に因らず、我々皆様方の普段の職場、生活、そういうところと違った沈黙の世界であります。その中に素晴らしいものが込められているのは、砂漠の真只中にありとあらゆる素晴らしいものが秘められている。深い地中には、信じられないほどの清浄で冷たい生命の水がコンコンと流れている。それによく似ております。沈黙の砂漠ぐらい素晴らしいものはない。我々の「只管打坐」の坐禅はこれと同じであります。そういった素晴らしい、仏祖の正しい行としての坐禅。この瞬間は誠に尊く素晴らしいものであります。坐禅の時間こそ素晴らしいものはない。この素晴らしい時を徒や疎かにせず、けっして自分の行なんていうレベルでなく、仏祖がいま行をしているのだ、これはお釈迦様の行なのだ、道元禅師の行なのだ、こういった気持ちでお互いに坐りたいものであります。

「仏祖の屋裏に大尊貴生なるは結跏趺坐なり」

平成十三年五月 合掌

上智下愚を論ぜず

利人鈍者を簡ぶと莫れ

『普勸坐禪儀』の中の一節であります。人間は人権の上からは皆平等だ、差別がないといわれておりますが、実際にはあります。だって記憶力の特別良い人と良くない人、或いは形といいますか、背格好の小さい人大きい人、様々な方面にわたって現実には区別があるわけです。大体八十パーセント以上の人が、自分の方が人よりも劣っていると思っています。それで自分より優れている人を羨ましいと思う、可笑しなもんですね。自分の良いところに気がついていない、自分の素晴らしいところがわからない、これが現実の姿でございます。

同じように仏教の教えに接しながら、それをキチット受け入れられる人と、られない人という。これは、そういった求める心のありようによって違う訳です。考えてみると、これは頭の良し悪しとか、記憶力の良し悪しとはまったく関係がないですね。

そういうことよりも、必死で求めている人にはガンとこう入ってくる、上の空の人には入らない。当然であります。道元禪師

が「利人鈍者 上智下愚」なんて上と下みたいに分けたり、利と鈍に分け、これは仏教の受け入れ方をいつているのであります。人間の差別を言っているのではない。人それぞれ様々ではあるが、こういう意味でございます。仏教の受け入れ方には様々あるけれども。実は原文ではその後がありまして、「專一に功夫せば正にこれ弁道なり」、こういう素晴らしいお言葉がその後についている。

「專一に功夫弁道すれば」、これが本当の行になるんだ、「專一に功夫」ということが眼目でございます。余念を差し挟まず、坐禅の時は坐禅だけ、あとのものは全くなし、自分という愚かなはからいはなし、“いま仏の行である”、“仏さんがいま坐っているんだ”、“自分じゃないんだ”、この坐禅であります。ベテランであろうと初心者であろうと全く変わりなし、仏教の知識がどれだけ詰め込んであろうとなかろうと関係なし、本気になって今やっているかやっていないかだけのことだ！ 全くもって現実の今、この重大さを教えられているお言葉であります。

「上智下愚を論ぜず利人鈍者を簡ぶこと莫れ」

平成十三年六月 合掌

雲くもきたり水みづきたりて身みを

現げんじ法ほうを説とく

『永平広祿』第一巻の中の一節であります。「雲きたり水きたり」、雲や水のようにどこからともなく修行僧が集まって来る。雲水が集まって来る、雲のようであり水のようでありますから「雲水」という訳です。そしてまたどこかへ消えて行く、このお言葉は、だいたい食事の調達が満足になされて初めて修行が出来る、というお言葉に続いていわれているお言葉であります。

まず食事が調えられ我々の健康が維持されていないと駄目、これは当然であります。その上にたつて、何処からともなく人が集まって来て、そして「身を現じ法を説く」、仏の身を現するのであります。我が身であつて我が身でない、仏の身を現わす。ここに、坐禅が普通のことでない意味があるのであります。「只管打坐」の坐禅、何のはからいもない坐禅、頭の中を空っぽにする坐禅。普段の生活を忘れ去った坐禅、自分をなくした坐禅。その時に仏様が現われて来るのであります。

だから仏様を現わすにはわけはないのであります。仏様になる

のはわけはない、ただ仏様がズット続いている、それが凡夫の浅ましきであります。でも一時いっときでも一時いちじでも仏様が現われて来る。そして法を説く、仏様であればやることをな為すこと話すこと、全て法を説くことになる。仏法を説くことになる。なるんでなく、仏法を説いているのです。道元禪師がそうおっしゃっている。

「身を現じ法を説く」、言葉に出さないので法を説いている。私共は、余計な無駄な言葉をしょっちゅう口から吐いております。ですけれども、坐禅の時は沈黙、坐禅の時は口を動かさない、その無言の中で無言の法が説かれている。言葉でゴチャゴチャ言わないからこそ皆和やかに円満に坐禅が出来る、沈黙の素晴らしきであります。遠くから近くから、本当に今ここに雲や水のように皆様方が集まって来て一時いっときの坐禅をしている。素晴らしいことであります。感情的や情緒的に素晴らしいのではない、“仏の身を現じて法を説いている”から素晴らしいのであります。仏の身を現じて法を説いている時、つまらん考えが浮かんでくる筈がない、お互い仏様であります。

「雲くもきたり水みづきたりて身みを現げんじ法ほうを説とく」

平成十三年七月 合掌

且く存するほど

眠りて虚しく時を過す

もつとも愚かなり

故に仏法は衰えゆくなり

『正法眼蔵』『随聞記』の中の一節であります。道元禪師が中国へ若い時に渡られ、天童山の如浄禪師のもとで修行された時の記録であります。この一節は、その時に天童山で見聞した箇所があります。「且く存するほど眠りて虚しく時を過す」とは如浄禪師が示されたお言葉、これを道元禪師が惹かれておられるのであります。「且く存するほど」、これはほんの短い命のある間という意味です。我々はほんの僅かな短い生涯を与えられているのに過ぎない、大人になってから死ぬまでも僅か五、六十年しかないのです。身体が動かなくなる、遠くへ出かけられない、それはもうすぐでございます。それなのに坐禪堂で眠りをこいている。

「眠りて虚しく時を過す」というのは、これは最も愚かである。坐禅というのは眠る時じゃないのです。緊張している時なのです。緊張しているべき時に眠るとは何事だ！眠る時間なんか他にいくらだってある。賤しくも坐禅をしている今、この時、眠るとは一体何事か、こういう意味であります。そんなふうだから「故に

仏法は衰えゆくなり」。正にその通りであります。如浄禪師は眠っている雲水を一人見かけると常に啓発された。天童山では朝は二時、三時から起きて坐り、夜は九時、十時まで坐っていた。ですから若い雲水は眠くなります。それをそういつて啓発され、説明され、警策を振るい、或いは拳骨でもって打擲し、或いは履いている靴を脱いで靴で叩いた。今日でいえば暴力沙汰になることです。人權問題になるかも知れない。ところが天童山の雲水達は打たれることを喜び、打擲を本当に慈愛の鞭として受止めて皆歡の喜涙に呉れて坐禅弁道に励んだ、道元禪師は書いておられます。道を求める者の集団というものは、そういうものです。皆様方はプロではないかも知れないけれど、道を求めるということでは全く同じであります。仏教、仏道というものを自分の生涯の柱にして、いま坐っておられる筈であります。暑いときは眠くありません、これが一番の禁物、眠くなるからこそ勇猛心を奮い起こして坐る。今この仮初の命、僅かな尊い時間、これを疎かにしまい。そういった気持ちでお互いに坐る時には確りと坐る。こういう坐りをお互いに心したいものであります。

「且く存するほど眠りて虚しく時を過すもつとも愚かなり故に仏法は衰えゆくなり」

仏法ぶつぽうにあいたてまこころと無量むりよう劫こころにかたし

『正法眼蔵』「八大人覺」はちだいにんがくの巻の最後に近いところの一節であります。昨日は道元禪師の七百四十九回目のご命日でありました。全国の曹洞宗の寺院において大なり小なり法要が行われました。当山においても誠にささやかな法要を朝行しました。五十四才を一期ことしてお若くして亡くなられた道元禪師が、最後に渾身の力を振り絞って説かれたのがこの「八大人覺」はちだいにんがくの巻。「八大人覺」というのは、お釈迦様が最後の説法としてお説き示されたお経ぶつしはつねはなりやくせつきようかいきよう。「仏垂般涅槃略説教誡經」ぶつゆいききよう、略して「仏遺教」、このお経の中で説かれている中心が「八大人覺」はちだいにんがくであります。これを道元禪師がご自身の『正法眼蔵』の最後の巻、もうおそらく自分の命は間もない、ことを悟られてあえて、お釈迦様の「八大人覺」はちだいにんがくをテーマに説かれたのであります。その最後に近く「仏法ぶつぽうにあいたてまつること無量劫むりようこころにかたし」。我々は人間に生まれてきたということが実は大変なこと、まかり間違えれば虫けらか、一本の草だったかも知れない。ところがなんと人間として生まれておる。これは何という幸いか、前世において素晴らしい善業を積んだことによつて人間に生まれ出ることができた。その上「仏法ぶつぽうにあいおう」こ

とは、また難知難遇である。正しい仏教にあつて、仏教の光に包まれ、仏教のありがたい教えを我が生きがいとして生きて行かれること、こんな素晴らしいことはないじゃないか。なれば今のうちに怠ることなく仏法を学んで行こうじゃないか。こういったことをお亡くなりになる直前であるにも拘わらず諄々と説き示されたのであります。

時に正月六日。その年体調を著しく害され、京都までやつと辿り着きますが、新暦の九月二十九日に遷化されました。

この道元禪師のお言葉を、私共がしみじみと感じとりたいものであります。何故いま、ここで坐っているのでしょうか。これは奇しき仏縁であります。仏縁という以外に例えようもない、大海原おおうなばらを水亀が百年に一回水の表に顔を出す、そこに板切れがある、板切れの間に穴がある。それが大海原の何処かに浮かんている。たまたま、その板切れの間に顔を出す、これは確立からしますと無限むげんに零ゼロに近い”、その零ゼロに近いたった一回の確立、そのくらい仏法に逢いおうことは大変のことです。ところが私共は普段そういったことを感じていない。道元禪師の最後の教誡きようかい、これを本当に、とことん味わえば、これは大変だ“本當の坐禪に徹しよう”とならざるを得ないのであります。「仏法ぶつぽうにあいたてまつること無量劫むりようこころにかたし」

平成十三年九月 合掌

ひと 人の鈍根といつは 志の

いた 到らざる時の ことなり

『正法眼蔵』「随聞記」卷三の中の一節であります。人間は優れているとか、劣っているとかの価値判断をつけて、自分は鈍い、鈍根だという評価をしたがる訳でございます。

ところが道元禪師は、人の鈍根なんていうことは、要するに志が足りないことを言うのだ、そういう時の言葉だ、こうおっしゃるのであります。私共はどんなことでも人と比較する、比較したがる。そして優劣をつけて、自分はこういう点は駄目だ、こういうことはあの人の足元にも及ばない、と言って劣等感みたいなものを持つ。まあ良い意味にとって、人を見習うという場合もございいますから、自分の劣ったところを悟って精進努力する。それはそれで良い訳ですが、生れつき鈍いという鈍根観を持ったらお終いでございます。自分は生れつき、これは駄目なんだ、あれは駄目だ。こう決め付けてしまう、これは実に危険でございます。

道元禪師は人間、一大事の時、例えば馬に乗っていて落っこっちゃった。昔ですから車から落ちるとは云わない。電車から投げ出されるなんてことは言わない。乗り物といえば馬です。馬から

落ちる時は、瞬間で落ちるのではない。何秒かかかる、その何秒の間に人間は最善の努力をする。頭にひらめくものがサーッと出て来て最善の努力をする。これは鈍根も理根も無い！その人の智慧の働きなんだ。確かにそうでございます。そういう身の危険、命に拘わる時は最高最大の智慧が発揮される。道元禪師はそのつもりで“切なる 志”を持ちなさい、こう教えられております。生れつき鈍根なんか無いんだ、みんな平等だと言うのですね。

ましてや仏法という器というレベルにおいては皆平等、肩書きも、学歴も、性別も、社会的な地位も、職業も皆関係ない。全員平等、これが仏法の器というもののレベルである。全員スタートに立って歩んでゆく、そうおっしゃるのであります。実に取りがたいお示しでございます。只ありがたいのではなく、こうなりますといたずらに十年、二十年古いとか、まだ今回で何回目だとか関係が無いので、古い方は惰性に落ちるといふ悪弊がございます。一回一回が初心のつもりで坐禅をし、仏法を身につけます。こういうことでないと、本当のものが身に着かないのであります。悪い惰性が身についてしまうと始末が悪い、この辺をよくよくわきまえたいものであります。

ひと 人の鈍根といふは 志の 到らざる時の ことなり

平成十三年十月 合掌

正にとかく

心に願うところなき

これを名づけて道という

總持寺を開かれた瑩山禪師の『傳光錄』という書物の第二十一章のお言葉であります。

「正にとかく心に願うところなき」心に願うという。こうしたいなあー、なってもらいたい。こういう為の行というものは仏道ではない。そういうものが一切ないところ、ただ愚の如く魯の如く馬鹿になって行ずる。これが本当の仏道なんだ。こういうお示しであります。

人間は何かを行うことは必ず目的があって行うんだというのが一般常識であります。ですから無目的の行、無所得の坐禅。こういうことが合理主義というものによって支えられている欧米の人達にはさっぱりわからない。無目的の目的なんかありやーしない。無所得の行なんてナンセンスだ、こういうのであります。ところがそれは理屈であって実際に、そういう行を行ってみて、

初めて納得するミゾオチする、となるのであります。道元禪師や瑩山禪師の教えられた坐禅は“正に無所得の行、無目的の目的”

であります。瑩山禪師はただ長く坐ればいいものでもない。持斎といつて斎を持つ、という行がありますが、これもただ饑しい饑じいと思ひながらそういった行をすればいいものでもない。こういうふうに変幅の広い禅風を示された方であります。その瑩山禪師が「心に何にも望まない、願ひ入れがない」、これが本当の道なんだと、こういうお示しは一般常識からすると破天荒であります。が、また深い味わいがある。古参の方には納得がいくであります。しょうが、新しい方にはなかなか納得できない。とかく“ため坐禅”になりがちであります。しかし、何のためでもないんだ、ということ、ひとつ坐り込むことによって納得していただきたい。こう思うのであります。それ以外に理屈で納得しても駄目だ、ということであります。

「正にとかく心に願うところなき これを名づけて道という」
こういう道を行じたいものであります。

平成十三年十一月 合掌

学道は火を鑽るがとし

煙に逢うもまた

休むことなかれ

道元禪師の漢文の語録であります。『永平広禄』巻五のお言葉であります。「学道は火を鑽るがとし」、学道とは、参学弁道、仏法を学ぶということでございます。それは「火を鑽るがとし」火を鑽るということは、火打石のようなもので火を起こす、これを火打鎌ひうちがまのような道具で点火されて、そこから煙を出しやがて火を発する。それを火を鑽るといいます。参学弁道は、たとえば「火を鑽りだす」ようなものであります。煙を見て“それでよし”と思つては駄目だ。火は起こらない、煙を見てもまだ止めてはいけない、火を鑽り続けないと煙が消えてしまふ、火を鑽り続けて始めて火を発する。まあ、ただそれだけの意味でありますが、これは唐の時代の禪の達人龍牙和尚りゅうがわうの詩の一節であります。龍牙和尚はこの言葉に続いて、「悟りが現れるまで待てば本来の面目がやがて現れるのだ」、つまり“火をおこす”ということとは悟りを開くということなんだ、こういう意味の詩を詠っております。龍牙和尚は詩の達人で多くの詩を残されておりますが、その一つの詩でございます。

道元禪師は、龍牙和尚のこの詩を頭の部分だけでもじつて後半は全く違う。どういうふうに違うかと云いますと、龍牙和尚は「悟りが現れるまで待てば本来の面目が現れる」とそのところを、道元禪師は「悟りは驀まつしぐら地に現れているんだ」、これが世の中で一番素晴らしいことなんだ。こういう意味の詩を詠われております。つまり龍牙和尚は坐禅をして、或いは他の行ぎょうでも、そういうものをずっと続けることによって、「だんだん悟りというものが開かれるんだ」、こういう立場。

それに対して道元禪師は、「真剣な坐禅を行おこなった時がもう悟りなんだ」、この違いであります。

道元禪師のいわゆる「只管打坐」の坐禅の面目躍如めんもくやくじょたるものがございます。ここに禪師の坐禅の行の仏法としての深い宗教性、そういうものが漲みなぎっております。われわれは“いま真剣に坐る”、“その時はもう悟りなんだ”、こういう意味であります。これは理屈でない、本物でなくてはいけません。時正ときただに成道会、“成道を讃える日”であります。私共も悟りを待つ坐禅でなく、悟りそのもののストレートの坐禅を、お互いに行いじたいものであります。「学道は火を鑽るがとし、煙に逢うもまた休むことなかれ」

平成十三年十二月成道会 合掌

仏祖の児孫かならず坐禪を 一大事なりと参学すべし これ単伝の正印なり

『正法眼蔵』『坐禪箴』の一節であります。「仏祖の児孫」、子供と孫と書きます。要するに仏教の信者、仏教を生涯の宗教と定めてそれに生きる。これが仏教の信者、信徒である。その「仏祖の児孫かならず坐禪を一大事なりと参学すべし」と。一大事でありますからこれ以上のものはない。“命がけでぶち当たるべきこと”、これが一大事ということであります。苟も生涯この道に生きるんだ、と決めた以上は命がけで参究する切なる志がなくてはならない訳であります。その一大事として行うべきことが坐禪である。

「これ単伝の正印なり」、単伝というのは単位の単ですから、一人にそれが伝わる。純粹にただ一人から一人へとズーッと相伝して行くと云うことが単伝であります。お釈迦様から摩訶迦葉尊者から阿難陀尊者にと、ズーッと正しいお釈迦様の一大事因縁の仏法、これがインド・中国・日本と三国にわたって伝えられて来た。その中枢こそ坐禪、こういう意味であります。お血脈に書かれてある仏祖の方々が代々受け伝えて来たのが、ほかならないこの坐

禪であります。正しい坐禪、こういう意味であります。それがキチット自覚されていないと、仏教に生きるものではない。世間一般を見ますと、いわゆるご利益仏法、お頼み仏法、そういうものが流行しております。これも仏教でないとは言えない、仏教が発達した一つの形態であります。しかしお釈迦様の正法とは言えない、道元禪師がこれが正法だとお示しされたのは、そういうお頼み仏法、ご利益仏法ではなくて“自分が仏になる” 仏法である。“自分が仏になる仏法” これなんです！。

それは只管打坐の坐禪を行う、本当の坐禪を行う、確り行う時にもう仏様。これはお釈迦様が教えられ、代々のお祖師様が受け継いで来られた正伝の仏法、こういう意味であります。私たちはそういう強い自覚の上にたって、“素晴らしいお釈迦様のいのちとしての坐禪” を行じなければならぬのであります。

「仏祖の児孫かならず坐禪を一大事なりと参学すべし これ単伝の正印なり」

平成十三年十二月 合掌

生死事大なり 無常迅速なり

『正法眼蔵』『随聞記』の一節であります。もとはといえば、唐代の「六祖壇経」の中に出ている言葉ですが、六祖さまの言葉ではなく、六祖さまの問いに答えた永嘉玄覺という人、この人は大学者でありながら六祖に参じてそのお弟子になった人ですが、この玄覺の答えが「生死事大無常迅速」であつたと、こう伝えられております。

また、いつのころからか禅門では、修行者が先生に個人的な教えを請う場合に、まっさきにのべる言葉が「生死事大無常迅速」。これが伝統的な作法とされております。とにかく切迫しているということ。だからこそ道元禅師はこの言葉を引かれて、学道者を策励されたのであります。

いま、当山でこの坐禅が終わると、間もなく回廊の開講板が鳴り出します。その板に書かれている四行の文字を帰りに見てください。最初の二行がこの言葉。板を打って開講を知らせると同時に、いまが刻々と「生死事大 無常迅速」なることを覚られる音なのです。

だいたい、「生死」とは、いうまでもなくオギャーと生まれて

から死ぬまでの人生、これが「生死」。この人生がきわめて重大事である、一大事因縁であるということ。人ごとではない！

ほかならぬ自分の、おのれの人生における一大事です。これをズシーンと決着しないで、何の人生か！何を生きているのか！淡々と坐るのが、おの

れの決着。頭ではなく、いのちのはたらきです。今こうして、ここに私たちが坐っている、確かに。だが、前回とはもう顔ぶれも人数も大きくちがう。天候も寒さも、みんなちがう。

ついこの間、お正月だと思つたのに、もう今は二月の終わりです。まぎれもなく二月が飛んで去る。この次にはもう坐れないかもしれない、一期一会であります。これを「無常迅速」といわずして、いったい何といえるでしょうか。

まったく人生は無常、世の中も無常。最近では仏教界の大物が次々に亡くなられます。私も皆様も、元氣なうちでないと、こんな素晴らしい行、素晴らしい坐禅ができないのです！

今これっきりの坐、これっきりの行を渾身あげて行じたいものであります。

「生死事大なり 無常迅速なり」

平成十三年十二月 合掌